

2012年 8月9日・「下野新聞」では

フクシマの真実 世界へ

悲しみ、怒り、そして決意 日本語と英語合体版

フクシマからまもなく1年半。政府は関西電力大飯原発3、4号機の再稼働などを着々と進めるが、原発に反対する市民の輪も広がっている。このような折、原発によらない新しい社会・世界を目指すアンソロジーがコールサック社（東京・板橋）から刊行された。「脱原発・自然エネルギー 218人詩集」（3150円）で、原発を直視する国内外の詩人がその実態や放射能に汚染された福島への悲しみ、再生可能なエネルギーへの移行を訴える。（石川文子）

本県からも塚本月江^{つかもとつきえ}、貝塚津音魚^{かいづかつねお}、青柳晶子^{あおやぎあきこ}さんらが作品を寄せている。

同書は「1945～2007年 原爆詩一八一人集」（2007年8月刊）と対をなす。1年間の編集・制作期間を経て完成した。編者は震災後、いち早く「福島原発難民」を出した福島県南相馬市在住の詩人若松丈太郎^{わかまつじょうたろう}さんら6人。福島への真実を世界に発信したいと日本語、英語の合体版だ。

内容は「予知されていた悲劇」（1章）「繰り返された過ち」（2章）「メルトダウンを見つめて」（3章）「人に優しい電気をつくるために」（10章）など11章構成。序文と帯文はドイツの哲学者アドルノの言葉を「フクシマのあとに声を発しないことは野蛮である」と言い換えた音楽家坂本龍一^{さかもとりゅういち}さん。

今回の原発事故が何をもちたらし、一人一人がどう判断したかを如実に物語るのは現在も福島県内に住む詩人15人と同県出身の3人の作品で構成した「悲しみの場所・福島」（4章）。相馬市に暮す根本昌幸^{ねもとまさゆき}さんの「わが浪江町」は被災者全員に共通する胸中だ。「なぜそこを追われなければならないのか／答えてくれ／…地を這っても／帰らなければならない。／杖をついても帰らなければならない。」

会津若松市^{すずきひろし}の鈴木洋さんは「除染」で「…／2万年もの時を待たなければ／きれいにならないものを／どこに流すというのだ」と、その欺瞞性^{ぎまん}に怒りつつ「…まやかしだらけの世の中に／凜として立ち向かう勇氣／真の除染はそこからしか始まらない」と決意を新たにする。

津波で亡くなった人々への鎮魂の思いを表現した「海から聞こえてくる声」（8章）。死者と生者の対話は「脱原発・自然エネルギー」への大きなうねりに。10章は「人に優しい電気をつくるために」自然エネルギー・再生エネルギーを生み出すためにどうすればよいか、東京・大田区^{おさたまよこ}の浅見洋子さんの「エルベ川の寒さ」など想像力を駆使して具体的なイメージに挑戦した。

最後は「福島に寄せる海外詩人の詩篇」。米国・ワシントン州のジェニエン・ホール・ゲエレイさんの「セシウムは青く燃える」など英国、インドなどから19篇が寄せられた。世界に発信する詩のネットワークだ。

と紹介されています。